新進路指導の潮流

そして生徒が変わる

学習指導のカギとなるのは、生徒の自主的な学習習慣の確立であろう。特に今後、完全週5日制による授業時間数の削減と、新課程での学習内容の精選を受け、授業時間外での生徒の自学自習がより重要になってくる。しかし、学習習慣の確立は、何よりもまず生徒自身の進路意識の醸成があった上で可能となるものだ。

青森県立八戸高校は進学校として地域の期待を受け、かつては放課後の課外講習を積極的に実施していた。だが、そんな「教師が生徒を引っ張る指導」にいつしか限界を感じるようになっていた、と現在第3学年の進路係を務める黒坂孝先生は振り返る。

「本校では5年前までは1年次から課外講習を実施していました。しかし、進学実績は伸び悩みが感じられ、しかも生徒たちの家庭学習時間は年々少なくなっていました。教師が引っ張りすぎない方が、生徒の自ら学ぼうとする意欲を高めることにつながるのでは？　我々はそんな風に思い始めました」

近い将来導入される完全週5日制を考えても、それまで以上に課外講習を増やすのは最善の策とは言えない。八戸高校は発想を転換し、'95年度から1、2年次の課外講習を一斉に廃止した。

青森県立八戸高校

1年次からの啓発的進路指導で自学自習を生徒に促す

「部活動が終わったら、早く下校させて家庭学習に取り組ませよう、と。しかし、放っておけば生徒は易きに流されかねません。そこでクラス担任を中心に放課後や昼休みを使って個別面談を実施、家庭学習の重要性を説き、生徒に学習の指針を与えるようにしました」（黒坂先生）

活力を与える進路指導

しかし、生徒の家庭学習時間は思ったように伸びなかった。それならば課外講習を復活させた方がよいのでは？　現在の3年生を新入生として迎える直前の3月、同校の進路委員会では当然のようにそんな意見も出た。だが「入学時の段階から進路の意識付けを図る、啓発的な指導が必要では」という声が多かった。

「いくら生徒に『自学自習』と言っても、そもそも『なぜ学ぶのか』が生徒には分かっていなかったのかも知れません。学習活動の支えになるものが生徒には不足していたのでしょう。生徒一人ひとりに活力を与える仕掛けを考えよう、と1年次からの進路学習の充実に着手したのです」（第3学年進路係・一戸利則先生）

'97年6月、同校は1年生を対象に2泊3日の進路研修合宿を実施した。進路への意識付けをいち早く行うこと、中でも職業研究と大学の学部系統についての理解を深めさせ、2年次からの文理選択に向けての素地を作ることをねらいとした。

「この学年から、学校独自の進路指導の流れをノートにまとめ、生徒に持たせることになりました。ただ、年度末の決定で我々が資料を集める時間はなかったので、進路学習教材である『進路学習ノート』を採用することにしました。内容を見ると、低学年次での学部系統や職業の研究についての資料とワークシートがコンパクトにまとめられており、我々がやろうとしたことがそのまま形になっていたんです」（黒坂先生）

自分を見つめる機会を

「合宿では文系理系それぞれのコースの特徴と進路の解説、学部系統別の学問内容の説明と合わせて、『進路学習ノート』を使って自分の適性を考えさせ、さらに今後の人生のシミュレーションにも取り組ませました。それまでは、真剣に時間をかけて自分の適性や今後の人生などについて、考えたことがなかった生徒もいたでしょう。2泊3日の合宿で、生徒は自己理解の作業に真剣に取り組んでいました。生徒たちもじっくり考える機会を求めていたのかも知れません」（一戸先生）

黒坂先生は「本校の生徒は進学校であるが故に進路意識が希薄になりがち」と言う。

「高校入学後の面談では、必ず『なぜ八戸高校を志望したのか』を聞きますが、『大学に進学したいから』と答える者が少なくないんです。実際に中学校卒業時に明確な進路の目標を持っている生徒は少なく、逆に『八戸高校に入学できた』と安心したまま高校生活をスタートさせてしまう。つまり、高校生活での目標、そして進路へのこだわりを持ちにくいのです。合宿を通して、それではダメだということを1年生のときに伝えておきたかったんです」（黒坂先生）

黒坂孝
3学年のクラス担任、学年進路係。
数学担当。同校赴任15年目。
「生徒にほやりたいことを早く見つけさせ、それに向けてできる限りのサポートをしてあげたい。」

一戸利則
3学年のクラス担任、学年進路係。
国語担当。同校赴任3年目。
「教師として何年か先を見ていたい。自分を高めることが、生徒を高めることにつながるはず」
——青森県立八戸高校

1年次の進路学習は進路研修合宿を核に、LHRや夏休みを活用して志望学部系統の学問研究まで発展した。2年次には、志望校を3校くらいに絞り、『進路学習ノート』を使って講座・授業内容、大学院の中身、卒業後の進路、入試科目などについて夏休み中に調べさせた。

「生徒に志望する大学、学部・学科について調べさせたのはこのときが初めてです。最近はオープンキャンパスに参加する生徒が非常に増えていますので、生徒たちは大学案内だけでなく、自分の目で確かめてきたものも『進路学習ノート』に書き込んでいました」（黒坂先生）

この課題提出は2学期最初のLHRのときに行われた。クラスを越えて九つの学部系統別に2年生を集め、担当の教師に提出させた。このとき、担当教師はその学部系統の学問内容などについて各自資料を作成し、説明を行った。

「説明用の資料を作るときに、パソコンで学問情報などが検索できる『FINE system』を使った教師もいました。国語科の私は農学・生物学系統を担当したのですが、様々な学問の内容が分かりやすく説明されているので、短時間でその学問の概要を勉強できました」（一戸先生）

より啓発的な進路指導へ

低学年次からの啓発的な進路指導により、早くから志望校群を具体的に見つけた今年の3年生は、入試を間近に控えた今でも「模試の結果が思わしくなくても安易に志望校を変えたりせずに、入試直前まで頑張って、自分の学力を上げようとしています」（一戸先生）と言う。

「その意味では、3年間の取り組みは成功したのでしょう。今後は、見えてきた将来の目標に向かって、自分は何をどれだけ頑張るべきなのかを生徒自らが気付き、実行できるような指導を行っていきたいですね」（一戸先生）

3年間でようやく少しずつ成果が見え始めた。だが、「決まったことだから次年度も、という気持ちで取り組むと、段々本来の目的が見えなくなる。年度ごとの検証は欠かせません」と黒坂先生、一戸先生は共に語る。より啓発的な指導への創意工夫が今後も続けられるのだろう。